消去された「シャガールの妻」

(「愛の画家」をめぐる「妻」と妻)

女性依存の強かったシャガールの履歴に、なぜか一時期、女性の姿が封印された7年間が存在した。その真実をめぐって二人の女が壮絶なバトルを繰り広げる。愛人だった女性と新たに妻となった女性との間で…

私はイギリス人のヴァージニア・ハガードです。
スコットランド人の画家ジョン・マクニールと結婚していましたが、1952年に正式に離婚が成立し、もとのハガード姓に戻りました。

さて私とマルク・シャガールとのお話をしようと思います。
1944年9月2日の事でした。
数日前からウイルス性の伝染病にかかっていた彼の最愛の妻ベラ・ローゼンフェルトは、ニューヨーク州北部の田舎病院で帰らぬ人となりました。
戦時中の物資制限でペニシリンが病院になかったからです。
ベラは14歳の時に故郷のロシア・ヴィテブスクで、マルク・シャガールと出会い、そして愛し合い20歳で結婚…30年近く彼と生活を共にした女性です。
マルクが絵の中で絶えず「空飛ぶ恋人」として描きつづけた彼女でした。
そのベラが旅先で、突如、亡くなったのです。
第二次大戦を避けてアメリカに亡命中の二人でした。
二人にパリの開放が告げられ、ようやくフランスに戻れるのを楽しみにしていた矢先のことだったのですが…。

伴侶を失ったマルクの悲しみは深かったのです。
「雷は鳴り、雲は開かれた。…ベラはこの世から旅立った。すべてが暗くなった。」
その後、娘イダ夫婦のいるニューヨークに9か月近くも居座ったまま、思うように絵も描けなくなってしまいました。
彼は救いようのない鬱々とした孤独感にさいなまれ続けたのです。
困り果てた娘イダから、マルクの身の回りのお世話をお願いされたのが、この私でした。
当時、私は画家の夫ジョン・マクニールと娘ジーンの三人で暮らしていました。
しかし、ジョンは絵の創作にすっかり自信を失くし、心も荒れすさび、私にも暴力をふるうような状況でした。
彼との不安定な生活に疲れ果て、私も外で仕事を探しているところだったのです。
私の仕事は家政婦でした。
マルクのアトリエの窓からはハドソン湾とニュージャージーの緑の丘陵が見渡せました。
私はこの部屋でマルクの身の周りの世話を始めたのです。
…が、やがて、彼の話し相手も務めることになりました。
彼は私にベラとの思い出を語ることで少しずつ心が癒されていくようでした。
夫との葛藤で疲れていた私の心が、マルクの暗く淋しい心とうまくかみ合ったのでしょうか…。
30歳近い年の差がありましたが、彼は孤独な心のうちまで、私に話すようになっていったのです。
ある日、マルクは私を引き寄せて、彼の膝の上に座らせました。
内向的な二人の間に…いつしか愛情が芽生えていたのでした。

マルクは元気を取り戻し、新たな創作にも意欲的に取り組めるようになりました。
お互いにニューヨークの雑踏が好きでなかったので、ハイフォールズという片田舎に移り、二人で自然の中の静かな生活を楽しみました。
マルクは寝る前でも制作の傍らでも、私から本を読んでもらうのが好きでした。
本の中の話を聞きながら、マルクは色んな幻想をはばたかせ、絵のイメージをどんどん広げることができたからです。
やがて、マルクの絵の中に私らしい女性も描かれるようになっていきました。
私は妊娠し男の子を産みました。
マルクは幼くして亡くなった自分の弟の名前をとって、ダヴィッドと名付け、とても喜んでくれました。
マルクは私に夫ジョンとの離婚を勧めました。
しかしその当時、夫ジョンの暴力が娘のジーンにまで及ぶのが怖くて、私はなかなか離婚に踏み切れないでいたのです。
私がマルクとの結婚を延ばし続けていても、彼は私を愛してくれました。
しかし、マルクの愛をひとり占めすることは、娘のジーンを犠牲にすることにもなったのでした。

マルクとベラの娘イダは美術界のエリートたちを招待して、昼食会や晩さん会を開くことが好きでした。
パーティは頻繁に催され、多くの画家や画商や文化人たちが交流し合うのでした。
その都度、パーティの苦手な私は、マルクが少しずつ私から引き離されていくような妄想に襲われました。
じっさい、マルクとイダの間には父娘ならではの深い愛情もあったのでしょう。
マルクはイダと一緒の時は、いつも私を裏切るのでした。

やがて、マルクは日々ひたすら描きつづけ、芸術家の階段を上り続けました。
アメリカからフランスに戻ると、マルクは圧しも圧されぬ大画家でした。
彼は常に画商たちや批評家たちや画家仲間など多くの取り巻きに囲まれるようになっていました。
私たちは豪勢な邸宅に住み、かつての内省的な生活も、素朴で簡潔な生活も、自然に囲まれた静かな生活も、もう過去のものとなっていたのです。
時には、画商の要請で人々を喜ばせるような絵を描くようなこともありました。
それらは高額な額に入れられ、途方もない価格で売られました。
名声が彼から自由を奪いつつあったのでしょう。
彼はすでに富を求めるようになっていたのです。
マルクの作品の市場価格が上がるにつれ、彼は称賛の言葉にしか耳を貸さなくなっていました。
彼は名誉と地位だけにこだわる人間に変貌していたのです。
彼が敵愾心を燃やす相手はもうピカソとマティスだけでした。
彼はピカソとマティスには激しく嫉妬したのです。

イダは展覧会や催事を企画し、「シャガール」を世界中に売り込む才能に長けていました。
彼女の力でイスラエルでの展覧会が始まりました。
マルクはイスラエル国家から公式に招待されたのです。
彼の絵はイスラエルで大絶賛されました。
イスラエル国家がユダヤの英雄・シャガールを取り込もうとしているように見えました。しかし、民衆の一部はマルクの表現にいら立ったのです。
彼らの思い描くユダヤ教の世界ではなかったからです。
実は、マルクの描きたい世界は、槌音響く新生国家イスラエルでもなかったし、ユダヤ教の教義の世界でもありませ

んでした。
マルクがこだわり続けたのは、彼が過ごしたヴイテブスクのユダヤ人の暮らしや伝統的なロシアへの郷愁だったのです。
やがて、私はマルクとの宗教観の違いを絶えず意識するようになっていました。
マルクはある日、私にユダヤ教への改宗を求めました。
私は「ノー」と言いました。

イダが彼を世界的な表舞台にプロジュースすればするほど、マルクは私の内的世界から離れて行き、マルクがユダヤやロシアを絵の主題にすればするほど、彼は私から遠ざかっていきました。
私はユダヤ人でもなかったし、ロシア人でもなかったからです。
日々のストレスから逃れたい私は、自然療法を実践する若者たちのグループに出かけるようになりました。
嫉妬深くなったマルクは、私のそんな行動を制限しました。
そのグループには若い男たちがいっぱいいたからです。
彼はもうすでに支配者側の人間でした。

その頃、シャルル・レーランという写真家が、マルクの作品など撮影の一切を任されていました。
彼は才能ある詩人でもあり、マルクからとても信頼された人でした。
シャルルはマルクよりさらに一歳年上で心臓を患っていましたが、とてもユーモアのある魅力的な人でした。
ただ、彼は生活が貧しく、心の中にどうしようもない寂しさと暗さを抱えこんでいたのです。
私は彼と一緒に居るとなぜか心安らぐのでした。
きっと、彼の中の繊細で孤独な内面に惹かれたからに違いありません。
それは私が、かつてのジョンや、かつてのマルク・シャガールに抱いたのと同じ感情でした。
マルクがパリに行っている間に、私たちは熱烈な恋愛に落ちたのです。
ところが、帰国後、マルクは私のシャルル宛の愛の手紙を発見したのです。
……彼は鉄のような拳で私を殴りつけて床に倒し､何度も何度も背中を殴りつけた。そして私が立ち上がりかけると、再び殴り倒して叫んだ。「どうして僕にこんな仕打ちができるんだ？最悪の裏切りだ。あの男は人間じゃない！あいつは何にもなかったように厚かましくもイダの家にやって来た。嘘つきの偽善者め！お前も同じだ！」……
(「シャガールとの日々」黒田亮子訳　西村書店)

長年の念願だったジョンとの離婚も実現し、晴れてマルク・シャガールとの結婚だって可能だったはずなのに、私はシャルルの方を選んだのです。
あの頃すでに、マルクのそばで私は本当に窒息しそうだったからです。
私はダヴィッドと一緒にマルクの家を出ました。
ダヴィッドにプレゼントされたマルクの絵 17 点もすべて彼の部屋に置いたままで…。

マルクと私のこうした関係は、1986 年まで世間的にはおおむね封印されました。
それは後にマルクの妻になったヴァヴァが、私やダヴィッドをマルクの履歴から慎重に取り去ったからでした。
彼女はマルクとベラの「愛の神話」を作ることに奔走し、その神話には私が邪魔だったのです。
ヴァヴァにとって、「愛の神話」はシャガールのイメージ戦略には最適な材料でした。
「愛の画家シャガール」は世界中にばらまかれていきましたが、そこには私とマルクの愛の日々は入っていませんでした。

やがて、ヴァヴァがマルク・シャガール城塞の中のすべてを取り仕切るまでになりました。

すでにイダも父親のマネージャーの地位を外され、ヴァヴァがマルクの現実生活のすべてを管理することになったのです。
その平穏な「牢獄」の中で、マルクは卵を産み続ける女王バチのように、日々、絵を生み続けることになりました。
マルクは名声と成功に酔った、ちっぽけな人間に成り下がったのです。

私はロシア人のヴァランティーナ・ブロドスキーですわ。
通常、誰からもヴァヴァと呼ばれています。
ところで、私からもマルク・シャガールとあなたヴァージニアの話をしたいと思います。
あなたとシャルルの突然の駆け落ちは、繊細なマルクを地獄の底まで追い込んだのです。あなたに逃げられ、自尊心をズタズタに引き裂かれた彼を、その地獄の底から救い出したのがこの私でした。

どんな理由があったにせよ、要するにあなたは大画家の妻の役割が重荷だっただけなのではありませんか。
マルク・シャガールはすでにあちこちの国際舞台に招かれるまでの存在になっていました。
しかし、あなたは面倒な交渉事はすべてマルクの娘イダに任せ、自分自身の世界に逃げ回っていたのです。
マルクはあくまで芸術家なのであって、芸術こそが彼の生活のすべてなのです。
大画家ともなれば、当然、様々な実務や面倒な交渉事が多くなります。
あなたはそんな実際の役割よりも、子育てやあなた自身の趣味的な活動…つまり、自分自身にこだわり続けただけなのです。
実はベラもイダも自分の個人的な夢を捨てて、マルクの影になり彼を支える覚悟をしたのです。
だからこそ、無防備なままのナイーヴな彼を守ることが出来たのでしょう。
優しく淋しがり屋のマルクには、いつだって女性の愛が必要でした。
あなたも内気な性格でマルクの心の内側に入って行けたからこそ、彼の信頼を得て愛されたのでしょう…。

ところで、私がマルクとベラの愛を神格化したのは、やっぱりベラが魅力的な女性だったからです。
すべてを捨ててマルクへの愛に捧げたベラ…。
ベラはやっぱり魅力的だった。
ベラがどれほど素敵な天使だったかは、彼女の回想録を読んでいるあなたなら分かるわよね。
ベラは 20 歳の時、両親の猛反対を押し切り、階級の壁を越えすべてを捨てて、画家との愛に身を投じたわ。
結婚前にすでに女優として歩みつつあったにも関わらず…ね。
ベラはマルクの妻になった時点で女優という自分自身の夢もあきらめた。
マルクが生涯、そのことで胸を痛めていたことも彼女は理解しつつね…。
結婚後、ロシア革命の熱狂と抗争、パリへの亡命と流浪、反ユダヤと戦争の嵐、更なるアメリカへの亡命といった苦難と波乱の時代にも、いつもマルクに寄り添い支え続けたのは、このベラだったのよ。
そして何時だって、彼女は覚悟して、マルクの妻、子どもの母、絵のモデル、批評家、通訳者、交渉人のすべてを演じきったわけ…。
彼女には機転の利く実際的な能力、適切な判断力があった。
そんな能力はふたりの娘イダにもあったね。
しかし、残念ながらあなたにはそれがなかった…。
あなたは自分という殻をいつまでも捨て去ることが出来なかったのよ…。

私を悪者扱いするのは止してもらいたいものね。
マルクの履歴から「あなたとの七年間」を私が意図的に外したと非難しますが、それは当たりません。

なぜなら、マルク自身がそれを望んだからよ。
彼はあなたを激しく激しく憎んだ。
あの悪夢を忘れ去りたいという思いが…あなたとの日々のすべてを、彼の記憶から抹殺したいという思いになった。
自分の半生はベラとの甘美な日々だけで良いと、彼は私に言った。
また、マルクがあなたにユダヤ教への理解を求めたのは、ダヴィッドを子供として迎えたかったからなのよ。
マルクはあなたにジョンとの離婚を勧め、その暁にはあなたとの結婚を望んだこともあったわ。
しかし、あなたはそれを延ばし続けた。
そして…あなたとジョンの離婚が実現する頃には、あなたは愛人シャルルのもとに突っ走った。
マルクの心は深く傷ついたのよ。

だからこそ、イダの夫フランツ・マイヤーの「シャガール伝」から、あなたもあなたの息子ジョンのことも、私は一切外させた。
あなたにも分かると思うけれど、マルクがハイフォールズの田舎に転居した最大の理由はあなたとの関係を隠すためだった。
もちろん、あの頃はマルクも田舎の自然の暮らしを楽しんだでしょうけれどね。

あなたはマルクが子供を嫌ったと非難するけれど、そばで子どもたちに騒がれたり、泣き声で邪魔されたりするのは、彼の神経に随分と堪えた。
彼にとっては芸術の制作がすべてだったからね。
芸術家という者は創作の時はエゴイストであるべきと私も思うわ。
マルクが何の不自由もなく制作できるように、ベラもイダも絶えず事務的なことを処理し、展覧会を企画し、編集者やジャーナリストや美術批評家たちとの交渉にすべての時間を割いたのよ。
菜食主義で痩せぽっちのあなたにはそんな体力もなかったでしょうけれど…。

あなたは結婚という制度そのものが馬鹿げたことと言うでしょうが…。
私は現実主義者だから、イダに紹介されマルクと出会った時、私はただちに結婚した。
私はすでにそれなりの事業もしていたし、大変な額の財産もあったけれど、マルクに賭ける方が何倍も価値があると判断したの。
そう言えばベラも私もロシアの由緒ある名家の出身ということでは共通だった。
あなたはイギリス総領事の娘という地位に反逆したようだけれど、私もベラも言わば亡命貴族だったから、家柄の誇りだけは捨てなかった。
あなたはご自身の本の中で、…マルクは名声を得たために、画商や批評家たちが押しかける「華麗な牢獄」に、閉じ込められてしまった…なんて言っているよね。
でも私たちは、だからこそ、マルクが一切の面倒な俗事にかかわることなく、全神経を制作に打ち込めるようにした。
何度も言うようだけれど、ベラもイダも、そしてこの私も…マルクの芸術のため、自分の個人的な望みは捨て、裏方に徹することに決めたの。
あなたは逆にマルクに余計な心配ごとばかり負わせたけれどね。

ところで、結局、そんな裏方の役割では私が一番の適任者だったようね。
彼の後半生は、私が財産の管理人だったし、彼の完全な保護者だったの。
企画から交渉まで現実面のすべてをこなせたから…。
しかも私は完璧にそれらをこなしたわ。
それでマルクは私を絶対的なまでに信頼した。

だからこそ、最終的にはイダにもこの業務から退いてもらって、三人の子育てだけに打ち込めるようにしたの。
あなたはマルクが私と一緒になってから、ビジネスマンに成り下がったと言っているけれど、私からすると、芸術もビジネスなのよ。
私はブジネスに徹したわ。
そして彼を精神的な安定で包み、20 世紀を代表する大芸術家まで押し上げたのよ。
皮肉っぽいあなただったら、その安定こそが晩年のマルクを堕落させたとでも言うでしょうが…ね。

最後に…、
マルクはね、あんなに憎んだあなただったけれど、あなたの息子さんのダヴィッドには経済的な援助を惜しまなかったこと…これだけは言わせてもらうわ。
最終的にダヴイッドをマルク・シャガールの遺産相続人に加えたのはこの私なのよ。